

明治の佐伯三青年 (四)

龍溪・鳴鶴・鶴谷

御手洗 一 而

(贊助會員・埼玉真川藩市)

佐伯半紙

矢野や林の生まれた佐伯という土地柄には、一つの特徴がある。彼等を培った土壌には、おだやかな文学的・学究的な思想的背景がある。矢野や林が、明治の育成期に生きたということ、生きるのにふさわしい時代と書いたのがそれである。結論すれば、幕末維新の動乱期に生きる人ではなくて、乱治まり治育はぐくむ時に生きる人だということである。

有史以来佐伯地方は、中世史にみる大神姓佐伯氏と徳川期の毛利氏（長州毛利氏に關係ない）の他に、支配者による政權の交替はない。戦国大名大友氏の時代に、豊後国の南一帯を統括した佐伯氏も、大友吉統の朝鮮の役の失敗で運命を共にして除国された。以来豊後は八藩に

分割されて小藩時代を迎え維新に至る。この佐伯氏時代の七百年と毛利氏二百七十年が、全くの保守的性格を作りあげてしまっている。もし大友大名が、徳川政權まで大友藩として存続していたら、あるいは明治維新にもう少し異った変動があったかもしれない。ともあれ徳川政權下の毛利氏は、保身第一であり、中央からみれば問題外の小藩である。そのなかで藩学が非常に発達していた。有名な佐伯文庫は、当時和漢洋書八万冊を蔵し、青年藩主高標は、因州鳥取の松平定常・近江の市橋長昭とともに、諸侯のなかでも三大学者と称せられていたという。

なおこの蔵書についてはこんな話もある。文政七年十代高翰たかなかの時代である。藩は、この蔵書八万の中から珍書を選び、千七百四十三部、冊数にして二万七百五十八本を幕府に献上している。幕府はこれを昌平校・紅葉山文

庫に収蔵し、現存しているのみられる。話とはこの献書の理由である。佐伯藩では、当時世嗣ぎや政務で幕府ににらまれる事態はなにもない。あるとすれば、僅か二万石の所領の中に二千石の公領がある。この幕府直轄地は、自領になったり公田になったり、藩祖以来やっかいな土地である。藩では、この問題の土地を、二万冊の献書によって引き換えに払い下げを願う腹ずもりだったらしい。しかし幕府はそんなに甘くなかった。その賞与が馬鞍一領と時服であった。

藩主はがっかりしたに違いない。

政治的裏工作が足りなかったのか裏切られたのか資料がないが、この見通しの甘さと人のよさは、伝統的なものである。後年明治十四年の政変や大同団結に策動した矢野龍溪に、がむしゃらな行動的な、わるく言えば策士的機略があつたかこゝではしばらくおく。

又こんな考え方もできる。

藩校四教堂の伝統が、代々の儒官をみてもわかる通り、広瀬淡窓・帆足万里・三浦梅園の門下生であり、豊後儒界の流れを汲むものである。この豊後学派は大むね徂徠学派の系累下にある。徂徠が晩年哲学する生き方をした

ように、豊後儒者も詩文に長じ、内面的な思考型が多い。その著書においても天下経世論に及んだものをみない。四教堂には、特に徂徠学から分離した国文学者や在来の漢学者が多くみられ、維新を動かした国学や陽明学の旗手としての過激な行動型よりも、むしろ書齋型ということができる。

矢野や林は、こんな思想的背景のある土地に生まれたのである。

慶応義塾を創始した福沢諭吉が、豊後中津藩士であった若い頃は、同じくこの豊後学派からうけた漢学の教養の域を出るものではあるまい。かれがこの梓を一步飛び出し洋学（当時蘭学）を志して長崎に遊学するのは二十一年のときである。時代は変っているが、同じ年頃の矢野や林が、洋学に開眼した福沢門下生として東京で学ぶのも、時代のめぐり合わせであろう。

もう少し矢野についてふれておきたい。『龍溪伝』によると、「多門は敵、光儀は寛、先生はこの二人をつきませたようだ」、先生の「その骨格風才は光儀より寧ろ多門に髣髴たり」とは多門を知る古老の言葉である。祖

父の多門は、あまり峻厳すぎて、江戸詰めるときは家老との激論も多く、佐伯城下で敬遠気味であったという。父の光儀は祖父と異なり、「寛容温和、人をして駘蕩たる春風を想はせるような天性」とある。

そして、多門が好んで唐宋の名臣を評したように、矢野も『宋朝名臣言行録』をよく読み、父からは、西欧の訳書による『ロビンソン漂流記』や世界地図に親しみ、『坤輿図式』も読み聞かされたと述懐している。また、藩出身の医者である山田俊卿から種痘を知り、その普及のため、最初に矢野にうえさせたのも父光儀であった。こうして矢野は、東西の新知識を注入されている。だから慶応義塾入塾に際しても、父は言下に承諾したが、祖父は仲々承知しなかったらしい。矢野が洋学専修の動機は、前に書いたように弟武雄の大学入校による刺戟が大さい。

弟武雄は、父とともにいち早く上京していた。そして明治二年に、開成所を大学南校に復活したとき、新政府は全国から官費生を募った。これが当時の貢進生である。十五万石以上三名、五万石以上二名、以下一名の給費生を集めたとき、佐伯藩は、矢野に父の代りを勤めさせる

ため、弟の武雄を推した。その後矢野一家が上京することになるが、この明治四年の春、矢野は、弟の洋学の教科書を見ることによって、諸科目の細目まで知ることができ、洋学専修の一転換となったのである。

矢野は、林の上京について父や祖父にはなにも話さなかった。当時矢野は父から毎月学資として八円づつもらっていた。割合に楽な塾生活を送れたから、多分に若者らしい安易さもあった。明治四年当初の費用について、「慶応義塾社中之約束」の中に、追加として大へん参考になるところがある。

此社中に入て終業する者は、内塾外宿の別なく、大凡一月の費左の如くなる可し。

一、凡金二兩二分 月俸

一、金一兩二分 月金

一、金一兩乃至二分 塾の菜代

但し一度一匁、香の物は塾にあり。

一、金三朱乃至一分 洗湯

一、金三朱乃至一分 石炭油

一、金三朱乃至一分 塾本借用料

一、金二朱乃至三朱 洗濯

一、金二朱乃至三朱 履物及傘

一、金二朱 薬料

無料の時は此費なし。病重ければ非常なるべし。此高は唯平均を記すのみ。

一、金一分 筆紙等雑費

ノ 一口金六兩三朱

又金七兩

以上のほかに、一ヶ月十兩以上の金を費す者は必ず奢侈を為す者なり。生徒の父兄心得のためこゝに記す

とある。これだけでも当時の物価を知り得るが、実にこまかく分類されている。ちなみにこの年の五月十日、新貨幣令を制定して一兩を一円に改めている。矢野は二人で「なんとかなる」と思ったかどうか。それよりも林にこの洋学を学ばせてやりたい、その一心であったと思う。そして、一通の書状とともに久作に上京を依頼したことで安堵した。

東京・京都・大阪間に郵便制度が設けられたのは、この年の三月一日からで、全国的の施行は、明治五年の六月である。久作が佐伯に入ったのは、秋の終り頃である。

久作は大阪からの便船に手間どったが、佐伯に着くや先ず林の家を訪ねた。久作は、色白の小男にびっくりしたが、林の歓喜はいうまでもない。「矢野さんはおれのことを忘れていなかった」と、その友情に涙したにちがいない。矢野の手紙は簡単だったが、上京後のことは心配なく、とにかく便船のあり次第上京するようにと促していた。久作の用事のすみしだい便船を待つ約束をした。

久作は、翌日仲町にある旧藩の紙座をたずねたが、門が閉ざされたまゝで要領を得なかった。しかたなく、直接生産場の人々を探すことにした。佐伯半紙については、藩祖高政公以来の奨励事業であり、八代高標のとき、伊予大州から熟練工を招き、改良を重ねて販路を広げ、毎年十一万束の紙を大阪に移出していた。産地は、番匠川中流地帯である。その山間部に、楮・みつまたを植栽し、農村の家内手工業として発達したものである。しかし、維新の変革から廃藩置県と、地方制度の新配置は、中央から遠隔地の産業までは及ばなかった。

久作は、これはいかんと思った。

産地の農家を探しても、旧藩のように買上げてくれる信用がなかった。こんなところにも維新の波紋があった。久作は半紙の需要を説明し、仲間が自立して生産の必要性を説いたが、農民の不安は、そんな説明で不安を解消できる時代ではなかった。仲間をまとめる指導者のいないのも不幸であった。やはり、時代の流れにのれない手工業的な運命だったのかもしれない。久作は紙すきの技術を惜しいと思いつながら、豊富な原料について考えていた。

茂吉と故郷

林は矢野の手紙を何度も読み返しながら、興奮していた。「とうとうおれにも時がやってきた」と思った。母親に一言、「おれ東京に行くよ」といい放ちながら、林は矢野の手紙と一冊の本をもって戸外に飛び出した。一刻も早くこのことを楠先生に知らせたかった。小路から渡船場に通ずる船頭町の雑踏を駆けぬけ、加島屋の角を曲って楠宅に飛びこんだが先生は留守だった。林は又走りだした。目標は具庁舎である。堀割を渡って大手前に

である。旧藩名残りの大手御門を通り、御馬見所の馬場にそって山手に北上すると櫓門（現存）がある。その上が三の丸御殿である。庁舎は三の丸にあった。佐伯県は林の上京後大分県に統一されるが、その当時は佐伯県であった。七月の廢藩置県で生じた県であるが、大分県に統一されるまで、新知事の任命はなく、四ヶ月の間、大参事・権大参事が職務を代行していた。楠先生はこゝで権大属として出仕していたからである。

林は先生の姿を見つけるや否や、
「先生東京に行きます」

と、息をはずませながら矢野の手紙を見せた。先生は手に紙を通しながら、

「そうか、いよいよ行くか」

と、林の肩をたゝいて祝福した。

「茂吉、先輩は有難いなあ。矢野はそういう男なんだ。誰にでもできることではない。感謝しなければ。しかし、大へんな苦勞だぞ。男の意地にかけてもやりとげなければ」

「覚悟の上です」

林は、きっぱりと決意の程をみせたが、先生は、林の経

済状態から一沫の不安もないではなかった。しかし、ずゝんで若者の冒険を祝福することにした。楠先生が県庁に勤めていることはなにかと都合がよかった。

「次の便まで忙がしくなるぞ」

と声をかけながら、一冊の本を手にしていた。楠先生の眼は自然にその本にひきつけられていた。

「先生、矢野さんからことずかったものです」

先生は、「うん」とうなずきながら眼を離さなかった。人間の通義から始まる『西洋事情二編 卷之一』である。

「東京の洋学は進んでいる。茂吉こりや勉強のしがいがあるぞ」

「はい。先生この本は出発の時に残して行きます。上京すれば矢野が持っているでしょうから」

林は、惜しいと思いつながら恩師に残してゆくことを考えた。

「そうか。それは有難い。茂吉、これらが原書で読めるようになると大したものだぞ。時代の先端は、やはり東京でなければならぬまい」

楠先生は、青年が上京をあこがれるのも無理はないと思つていた。その後先生自身上京して新政府に推薦されて

いる。

それからの林は準備に多忙であった。

旅費や当座の費用は別にして、東京に遊学となると、かなりの出費である。そんな親の心配はよそに、林は上京できることで胸をふくらませていた。その頃、佐伯と東京間はわりに便があった。『鶴藩略史』によると、華族に列した旧藩主高謙公は八月に上京し、夫人は十一月に再度東京に帰っている。林は旧藩士や久作等と行動をともにしているが、はっきりした日時はわからない。

林は出発を前にして、書籍や手稿の整理をした。昨年矢野に貰った本や、四教堂時代、楠塾の勉強が急になつかしく思われてきた。いざふる里を離れるとなると、もの心ついてからの少年時代が思い出される。手稿を見ながら、こんな時もあったのかと、林は一人でやりとじた。すでに和紙の色が黄色く変色している。三、四年前のものであろう。

玉井水滸竜上^レ天、竜卵夜碎井気醒
の書き出しである。

矢野は後年林を知ったのはこの句を見てからであると語っている。林が十六才の時、唐の李長吉の体にならつて、廢屋の課題を課せられたとき、この句の奇抜さに驚くとともに始めてこの少年を知ったのである。

林は、次の文章でも眼を止めた。維新後天下の治乱を論じた文章である。

成敗之事果在天乎、我不可得為也、若夫在人乎、我可得為也。

矢野が期待した才知が、少年の林に天性として脈々としている。天や神の所行は自分の力では及ばないが、人間のする事であれば自分でなんでもできるといふ自信、これが林の特権意識でもあった。

次には、まだ新しい一つの見出しをじっと見つめながら、楠先生と学習したこの一篇は、矢野さんに見せなければならぬと思つた。矢野さんは、よく政体という言葉を使つていたが、もうすぐ再会できると胸がこみ上げてきた。

民是国之本、本固国安、未有其本乱而未治者、云々

(去遊民論)

民之所欲、天必從之(藤房論)

明らかに、これは孟子君臣論の影響であろう。東洋的民主思想、東洋的民約論的考え方は、おそらく楠先生の

影響である。楠先生が師とした佐藤一斎には、孟子書注釈書として著名な『孟子欄外書』がある。林は、明治三、四年頃、矢野と別れてから孟子書を盛んに読んでいた。後年著述した『済民偉業録』の済民の着想は、すでにこの頃、林の体内にひそんでいたであろう。明治元年以来、三十四年間の人間の成長が、漢学の素養を通じて、漢詩やその文章の一端によく現われている。

当時の青年達は、一度故郷を離れると、錦を飾るまで再び故郷の土を踏まないという覇気があった。大方の整理が終ると、翌日、林は一人で城山に登った。維新以来あまり登る人のいない城山であった。山道は荒れ放題に荒れ、旧藩の体制の崩壊を知るのに充分であった。(上京したら今度はいつ帰れるかわからん)と、一步一步感慨をこめて上った。四民平等の布告が、徳川二百七十年の歴史の根源をさか上らせるようであった。曲りくねった山道を一刻もして頂上に立った。

山城の石垣が重苦しくのしかゝりながら、あわれにも見えた。旧藩時代から、藩の政務はすでに三の丸で行なわれていた。昔の佐伯城は、頂上に鶴の翼のように北の丸と二の丸をようし、真中に天守閣の偉容を誇っていたが、この時には、すでに石垣しか残されていなかった。林は石垣の石を一つづつ撫でながら権力と悲惨の歴史を

考えていた。佐伯城築城に関しては、古老の『茶吞話』として小冊子に残されている。これだけの大石を荷上げした民衆の苦行と、支配者の権力が、今となっては、いみじくもなくなるともなく調和するともなく、自分の立っている位置をす通りする通り風のように感じられた。しかし、そこには新しいものがあつた。殿様ではなく一介の青年林茂吉が立っている。

「やはり時代は変わったんだ。新しい時代がきた」
頂上に立った林は、実感としてその意味を味わうことができた。しかし不思議にも思えた。二三の大藩で成就した維新が、新政府の名のもとに、この小藩にまで次々に新制度をうちだしてゆく。その頭脳と目標とは、若い林には理解し得ないものであつた。

「矢野のいう政体、国の在り方を自分の眼で見届けること。あわよくば、その大事業に自分も割りこまねばならぬ」

上京後の英姿を決意の中に秘めて、頂上に立った林は、秋風の冷たさもすっかり忘れていた。

城山からは城下町が一望に見下ろせる。町をとり囲むように番匠川が佐伯湾に注ぐ。住吉神社に船倉と眺めながらわが家を確認した。両親のこともちらっと脳裏をかすめたが、三男坊という気安さもあつた。遠くに前の島と

いった大入島が見える。林は矢野に連れられて一度渡つたことがあるのを思い出した。大入島には狩猟のために矢野家の別荘があつたからである。

番匠川の向うには灘の山々が見える。

「この景色ともしばらくの間お別れだな」

林は、なつかしげに喉に焼きつける様子で眼を閉じた。眼を開けて大きく深呼吸した。午後の風が吹き出すのをしおに下山の途についた。

家に帰ると久作が待っていた。

県庁舎から下りてきた久作が、便船のあることを知らせてくれた。都合よく林の知っている旧藩士が、新しく採用された佐伯県役人として上京するのも気強かつた。

その晩、林は従兄の山口家を訪れて上京の挨拶をすませた。従兄は、県令となつた矢野の父光儀の属僚として上京していたので、いつかは会えるかもしれないという希望もあつた。この従兄が、後に総理になつた犬養毅をこの林に紹介する橋渡しをすることになるが、これは茂吉が郵便報知新聞の主筆となつてからのことで、まだ先の話である。

林は、明日にでも楠先生に最後の挨拶をすませたいと考えていた。

(つづく)